

町づくりの民俗——〈祭〉から〈まつり〉へ

渡名喜 明

-
- | | |
|--------------------------|----------------------|
| はじめに——問題の所在 | 3. 「与那原まつり」の組織・構成・空間 |
| 1. 「与那原大綱曳」の「民俗」 | 4. 「まつり」の現在 |
| 2. 〈まつり〉に包括される〈祭〉——主体の変化 | おわりに |
-

論文要旨

沖縄本島南部の太平洋側に位置する与那原町は、夏の風物詩として県下に知られる「与那原大綱曳」で有名な小さな町であるが、戦前は沖縄独自の帆船「山原船」の拠点港として本島中北部と首里・那覇の都市部および本島南部を結ぶ物資流通の要衝であった。戦後の交通体系の近代化に伴って要衝の地位が低下する一方、「大綱曳」の主体として「実行委員会」を早々に組織化し、運営をになってきた中心街の六区連合は、世代交代やドーナツ現象による人口構成の変化などによって、次第に単独開催にいきづまるようになった。町全体の恒常的な「与那原まつり」に「大綱曳」を取り込むことによって、存続の危機を乗り切ると同時に町の活性化を目指そうという町商工会青年部が行った問題提起と全面的な協力活動が町当局を動かし、「第1回与那原まつり」が開催されたのは、昭和54年のことである。集落の聖地に参拝した後、「綱曳」「沖縄相撲」「演芸会」が開かれる従来のパターン自体は、規模さえ問わなければ他地域でも見られる農耕饗礼であり、「民俗」行事であったが、これらに全町民参加型のイベントや若者・子供向けの新趣向も加えて衣替えを行ったのである。

「大綱曳」の実施主体である「大綱曳実行委員会」と、その上部にあって「まつり」全体の統括と「大綱曳」以外のイベントを担当する町当局との不均等な組織構成ながら、全体として見れば依然として「大綱曳」主体という危ういバランスの上で構成されてきた「まつり」も、10年の節目を越えるとともに一部からマンネリ化が指摘され、また町当局による行政的な取り組みの一貫性のなさも手伝って、「与那原大綱曳」は新たな転機を迎えている。しかし、この「大綱曳」が昭和22年に再開されて後、紆余曲折を経ながら結局一度も中断されていない歴史的事実は、「チナムシ（綱虫）」を自称する一部町民の主体的な努力とそれに対する人々の支持を示すものであることもたしかである。

「民俗の変容」が叫ばれて久しい。それが「地域の変容」と構造的な関連を持つことについては多くの検証を必要とするだろうが、本稿はその「変容」を、「変える=つくる」「主体」の側からとらえようとする試みのひとつなのである。